

「ボランティアお断り」とは何だったのか (後編)

新井 純 (支援委員・十日町教会)

2日目は函館から江差に向かい、そこからフェリーで奥尻島へ渡りました。観測史上最大級と噂された台風が接近する中、島に渡ったはいいが翌日欠航して戻れなかったら大変だという緊張感の中、奥尻島の名物であるウニを模したゆるキャラ「うに丸くん」の歓迎を受けて上陸しました。

まず案内されたのは、津波被害の記録を展示してある奥尻島津波館でした。常時複数のガイドボランティアが常駐していて、入館者が希望すれば無料でガイドをしてくださること。離島ゆえ来場者は決して多くないとは言え、島民の皆さんの中にあの震災と津波被害を後世にしっかり語り伝えたいとの思いがあることを身に染みて感じました。

ガイドさんの案内を聞きながら館内を進んでいると、展示パネルの合間に小中学生の詩や短文が展示されていることに気づきました。

「地震が起こった。すぐに外に出た。灯台が崩れていた。走っている人たちは“津波が来る”と叫んでいた。友だちにあった。嬉しかった。次の朝、私の家へ行った。家がなかった。悲しかった。小学2年生」

「聞いた時には泣けなかった。またにっこり笑って、名前を呼んでくれるような気がして泣けなかった。また元気に“おはよう”って言ってくれる気がして泣けなかった。このごろよく思う、“いないんだ”って。“もういないんだ・・・”って。小学6年生」

恥ずかしながら、あふれ出る涙を止めることができませんでした。中越地震の被災経験はもちろん、東日本大震災直後に石巻市の日和山から見た凄まじいばかりの津波被害の光景などがフラッシュバックしてきて、過去の時間へ引きずり込まれるかのような恐ろしさを感じたほどです。思うに、被災者にとってその経験は、何年経っても現実なのです。

津波館の後は、その後の奥尻島の津波対策を観て回りました。漁港に設けられた一時避難のための施設、高台への避難路の整備状況、そして記念碑。一つ一つに、島民の命と生活を最優先にして計画が進められたことが伺い知れました。

2日目の最後は、北海道南西沖地震語り部隊から、奥尻の復興を考える会会長制野征野さん、奥尻町教育委員会事務局長の長崎武巳さんのお話を伺いました。被災からの復興や生活再建は、復興を考える会が島民との話し合いを重ねて行われました。ありがちな行政主導ではなく、そこで生きる人々の声に耳を傾ける復興の歩みは、決して楽な道ではありませんし、被災前から地縁血縁が多く相互互助態勢があった離島だったからこそ出来たのかもしれない。しかし、その知恵や努力からもっと学ぶべきでありましょう。

最終日は、東北教区被災者支援センター委員長上野和明師が発題してくださいました。その中で「活動が主の名によっているか、主の名にふさわしいか、それが大事なのであって、イエスの名が報告書に出てくるかどうかは問題ではない」とおっしゃったのに心から共感しました。前回記しましたが、キリスト教の看板を掲げなくても、御言葉の旗を振り回さなくても、その働きが信仰に基づいているのなら、それ自体が証しになるのです。このことは、阪神淡路でも、新潟県中越でも、そして東日本大震災でも証明されています。

まさに、キリスト者が隣人と共に生きようと志すことが伝道そのものだ！改めてそう思ったのでした。「結局最後まで付き合ってくれたのはキリストさんだった」と島の方々がおっしゃっていたのに胸を熱くしながら、帰路につきました。

エピローグ

震災に限らず、私たちは嫌が応にも自然災害と向き合わねばなりません。教会は救助隊でもなければボランティアをするための組織でもありませんが、目の前に倒れている人がいれば、見て見ぬ振りはできませんし、黙って通り過ぎるわけにもいきません。ましてや前述したように生き方そのものが神さまを証しし、信仰を表すのなら、困難な時に率先して立ち上がるのは当たり前のことです。

かといって、自然災害時の支援活動は思いつきでできるほど簡単でもありません。被災者への想像力を欠いた自己満足的な活動なら、「ボランティアお断り」という事態も招きかねません。

そこで、何度も繰り返されてきた自然災害への支援活動に携わってきた教区、地区、ボランティアの皆さんの経験や知恵が集められることが、この先またどこかで起こるかもしれない自然災害の際の支援活動に有用ではないかと考えるのは当然の帰結です。そのため、「支援活動のマニュアルを作って欲しい」という声は何度も上げられてきました。しかし、災害は一つ一つ違い、従って支援活動の仕方も違いますから、その場にあった臨機応変な対応が求められます。まして、ボランティア専門のチームがあるわけではないので、誰にでも使えるマニュアル作りは困難であるというのが、今回の参加者の一致した見解でした。

それでも、実際に支援活動は行われてきたし、そこに携わったのは皆素人ですから、たくさん失敗を繰り返しながら手探りで活動してきました。その際に参考になるようなものがあれば、もっと効率の良い初動が、大規模に行えるようになるでしょう。

それがマニュアルのようなものでないとなれば、事例集のようなものになるでしょうか。これまでも話題にのぼりながらなかなか着手されていないこの作業の必要性を、今回の協議会で改めて確認しました。

そして、事が起こった際の初動から短期的支援、その後の生活再建建物再建などを中心とした中長期的支援のノウハウについても、それぞれの経験を整理しておくことにより、被災地、被災教会、被災教区が主体的にこれらの活動を行う助力になるでしょう。

さらに、ボランティアリーダーの育成も課題です。例えば中越地震以後毎年冬に行われてきた雪掘りツアーは、除雪ボランティアの実践経験と、過去の災害支援活動を学ぶ貴重な機会でした。東日本大震災の支援活動において、雪掘りツアー参加者の学生さんたちが初動から活躍したことは知る人ぞ知る事実です。同じように、毎年青森や北海道で除雪ボランティアをしている教区や教会があるようです。そうした活動への参加者を含め、災害ボランティアの経験者や学ぼうとする者の中からリーダーが生まれ得ることが期待されます。

今回の協議会には、北海教区はもちろん、奥羽、東北、関東、兵庫といった震災被災教区、教団の対策本部などから参加がありました。何らかの成果を産み出すことを目的とはしなかった協議会ですが、共通する課題が多くあることが確認できた意義は大きいと感じます。そのため、参加者の多くがしばらくはこのような協議会が継続されることが望ましいとの希望を持って閉会しました。